第１回

「能・その幽玄なる美を探る　第２回」

令和６年９月７日（土）

講師：金剛流能楽師　熊谷（くまがい）　伸一（しんいち）　氏

能楽に入ったきっかけから社業と能楽修業に苦しんだ時代、両者の共通要素に気づいて両立できた時に家元から免許皆伝の辞を受けた事。能楽は簡素な舞台で演じられ、テーマは日本の古典文学に登場する優美な男女の霊や、源平戦で死んだ武将の霊などが多い。能の舞は、演者の丹田に貯めた心から発した気を基に、三丹田を情景に真っ直ぐに対峙させてゆっくりと舞う。

能の地謡は、演者独自の音程にて行う点が他の芸能と比較して特異である。例として、能楽「浮き舟」の謡の説明に加えて、源氏物語宇治十条の夫薫と熱情的な匂宮の両方の愛をめぐる心と身体の違いの煩悩に苦しむ浮舟についての解説の後、浮舟の霊である雪の精霊の舞の動画を鑑賞した。

参加者から能楽の今後についての質問があった。能楽舞台は狭く、観客も少ないので、演者にまわる演技代は潤沢と言えず、現在のように流派別の活動を続けることは容易でない。一方、それを逆手に取ってより特異な演技を目指す若者の活動もあり、流動的との回答。

○参加者の感想・意見について（主なもの）

・能は、何を表現しているのかが、最初の心の説明で理解しました。身近に接する事はまだないが、何かで観たりふれた時に、心を感じてみたいと思いました。

・能について詳しく説明してくださり、とても興味をもって聞くことができました。内面を表現するというコンセプトであることを初めて知りました。能の舞台に、実際に足を運んでみたいと思いました。

・今後能舞台を鑑賞する時の参考になりました。話もとても聞きやすかった。有意義な時間でした。ていねいに舞うビデオを鑑賞しながらの説明がわかりやすかった。もっと観たかったです。